国立国語研究所学術情報リポジトリ

現代短歌の字余りとリズムについての考察

著者	俵 匠見
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	6
ページ	2-14
発行年	2021
URL	http://doi.org/10.15084/00003477

現代短歌の字余りとリズムについての考察

俵　匠見（宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校）[1]

Poetry rhythm with excess syllables in modern Tanka

Takumi Tawara (Miyazaki Prefectural Gokase Secondary High School)

要旨

現代短歌は、字余りでもリズムの乱れを感じにくい場合がある。「名前のみ読み上げられる祝電のしゅうぎいんぎいんさんぎいんぎいん　松村正直」の下の句は８・８だが、リズムに乗って読むことができる。このような字余りの現状や特徴を捉えるため、現代短歌のアンソロジー歌集に収録された約２０００首を分析した。また、全国の歌人にアンケートを取り、字余りの感覚を調査した。結果、初句は字余りになりやすいが結句はなりにくい、字余りの場合は二重母音[ai]が句末に現れやすいなど、いくつか顕著な傾向が見られた。これらの現象を説明するためには、言語学の切り口が必要だと考えた。本論文は、現代短歌の字余りを分析することで、日本語のリズムを考察するものである。

１．　はじめに

現代短歌と言語学には深い関りがある。そのつながりは、字余りの定義を考えると見えてくる。岩波現代短歌辞典(1999)[2]の【字余りと字足らず】の項には、「短歌は五・七・五・七・七の五句三十一音から成る短詩と定義されるが、この字数の枠に当てはまっていない場合を指して言う。（後略)」とある。ここで、「五句三十一音」という表現に注目して欲しい。「文字」ではなく「音」なのだ。では日本語における一音とはなんだろうか。これは言語学で探究されてきた問いであり、現在も議論されている。日本語の一音の定義にゆれがあるならば、短歌の定型の定義、字余りの定義にもゆれがあるということになる。したがって、短歌を研究対象にすることは理にかなっており、言語学の議論の材料になる。例えば、以下のような議論を深めることができると考えている。

・音節、モーラ等の単位の再検討
・日本語の持つリズムの再検討
・日本語における二重母音とは何か

そして、本研究では現代短歌の字余りを分析するが、字余りの定義は「平仮名表記にした際、三十一文字よりも多いこと。ただし、拗音は表記上二文字だが一文字と数える。」とする。本来起こっている字余りの現象はより複雑だが、研究対象として捉えるために定義づけておく。

２　先行研究　古代の和歌における字余りについて

『万葉集字余りの研究』(山口佳紀,2008)の第一節では、古代和歌の字余りの通説をまとめた後、「『字余り句』は決して少ないとは言えず、特に句中に単独母音を表わす字が含まれている場合に集中するという事実がある。そのため、それらは『字余り』ではあっても、『音余り』ではなかったであろうと考えられているのである。そこで、改めて各句

---

[1] udonudontkm(at)gmail.com

[2] 監修は岡井隆、他九名の歌人の編集による近現代短歌の用語に特化した辞典

を音として検討することが必要になり、音として充足していたと見られる『充足音句』と、不足していたと見られる『不足音句』とが考えられることになる。」(p.29)としている。音韻的な要素が考察されており、万葉集の字余りを分類したところ、字余りである句[3]の終わりに母音を含む歌が大半を占めていたそうだ。その原因は、当時は朗読にて鑑賞されていたため、母音が前の音と繋がったり、脱落したりする場合があったからだと結論づけられている。

古代和歌の法則をそのまま現代短歌にあてはめることはできない。現代短歌では、撥音・促音・長音・外来語・口語調などの使用が増え、古代の和歌には無い要素の影響を受けているからだ。しかし、私見では字余りが音余りに直結しないという感覚は現代にも残っていると考えている。実作者として現代短歌に触れていると、リズムの乱れを感じる字余りと、リズムの乱れを感じない字余りがあると感じるからだ。ゆえに、字余りの法則性も何らかの形で存在していると仮定し、現代短歌の字余りの分析を進める。

３　現代短歌字余りの分析

３．１　分析の目的

字余りとリズムの関係性を明らかにすることが目的である。というのも、現代短歌では字余りでもリズムの崩れを感じない場合があるからだ。例えば、

「名前のみ読み上げられる祝電のしゅうぎいんぎいんさんぎいんぎいん　松村正直」

の下の句は８・８だが、リズムに乗って読むことができる。私見では、この歌の場合、[in]の連続やリフレインによってリズムが保たれているのではないかと思う。このような現象を、ケースバイケースの鑑賞ではなく、統計を用いて客観的に捉えたい。

字余りを分類し統計を取ることで、ある要素を持つ字余りが多い場合、その要素を含む字余りはリズムが乱れていないのではないか？と考察することができる。

３．２　分析方法

アンソロジー歌集『桜前線開架宣言 Born after 1970 現代短歌日本代表』（山田航・編著）の、2215 首を分類し、傾向を確認する。分類項目は、古代和歌の字余り研究を参考にした。『万葉集字余りの研究』(山口佳紀,2008)では、第何句に字余りがあるか、その字余り句にどのような単母音が含まれているか、の二つの視点から統計を取った情報を用いて論考していた。これをベースに、他の要素の影響の可能性を考慮し、より細かく分類した。音韻的要素は、促音、拗音、撥音とその前に接続していた母音(an,in,un,en,on)、長音、短母音とその前に接続していた母音(「未来」に含む[ai],「買う」に含む[au]等)を「特殊な音」と定義し、分類した。（図１)のように、①定型か否か、字余りの場合何句目が何文字余っているか、②字余りがあった場合、どこにどのような特殊な音があったか、③字余りがあった場合、どこにどのような助詞があったか、Excel に入力した。フィルター機能を用い、上記三つの項目を検索できるようにし、集計した。実際の作業画面は図１のようになった。

[3]五・七・五・七・七は、まとまりごとに初句・二句・三句・四句・結句と呼ぶ。

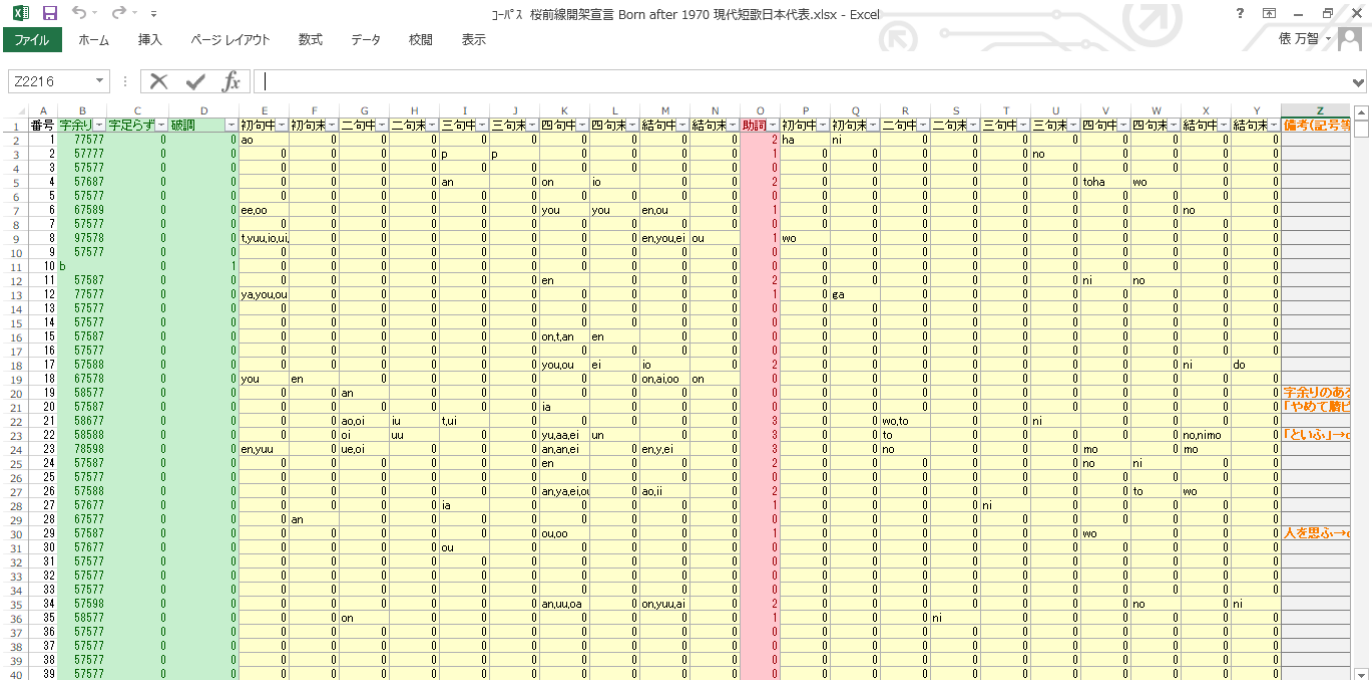

図１　集計作業の画面

３．３　分析結果

まず、定型が 49,9%、字余りが 47%、字足らずが 0,9%、破調が 2,1%だった。詳しい集計の結果は以下の表１～５に示した。ただし、助詞の分類項目は非常に多く表にすることが困難で、傾向もみられなかったため省略する。

表1　句別の字余り数

字余り句の文字数	初句	二句	三句	四句	結句
6	255		117		
7	152		16		
8	28	256	3	316	135
9	1	23	2	39	15
10	0	3	0	17	8
11	0	0	0	2	2
12	0	1	0	4	0
13	0	1	0	0	0
計	436	284	138	378	160

表２　形別の字余り数

昇順	字余りの形	個数	昇順	字余りの形	個数	昇順	字余りの形	個数
1	67577	128	34	59587	3	64	67678	1
2	57587	119	34	68588	3	64	67689	1
3	58577	106	34	68677	3	64	67777	1
4	77577	73	34	77677	3	64	67877	1
5	57677	46	34	79577	3	64	67987	1
6	57578	42	34	675107	3	64	68578	1
7	58587	32	44	57589	2	64	68598	1
8	67587	30	44	57599	2	64	68687	1
9	57588	27	44	57877	2	64	68688	1
10	77587	26	44	58597	2	64	68778	1
11	68577	25	44	58678	2	64	77589	1
12	57597	16	44	58777	2	64	77678	1
13	78577	15	44	67579	2	64	77797	1
14	67677	13	44	67697	2	64	78598	1
15	87577	11	44	69587	2	64	78677	1
16	67578	10	44	77588	2	64	78687	1
16	68587	10	44	77597	2	64	79687	1
18	575107	9	44	77687	2	64	87578	1
19	57687	8	44	78578	2	64	87597	1
19	58588	8	44	87587	2	64	87687	1
19	78587	8	44	88577	2	64	88587	1
22	57777	7	44	88578	2	64	97578	1
22	58578	7	44	89577	2	64	510577	1
22	58677	7	44	585107	2	64	575108	1
25	77578	5	44	585127	2	64	575117	1
26	57787	4	44	610587	2	64	575911	1
26	59577	4	64	57585	1	64	576127	1
26	67588	4	64	57595	1	64	579127	1
26	67597	4	64	57679	1	64	586710	1
26	67687	4	64	57688	1	64	595108	1
26	69577	4	64	57697	1	64	675710	1
26	87677	4	64	58598	1	64	685710	1
26	575710	4	64	58679	1	64	713578	1
34	57579	3	64	59579	1	64	775811	1
34	57598	3	64	59588	1	64	776107	1
34	57678	3	64	59677	1	64	875810	1
34	58687	3	64	67589	1	64	7126117	1

表３　字余り中の特殊な音の数

種類	句中	句末	合計
長音	632	111	743
撥音	427	69	496
拗音	242	23	265
促音	192	2	194

表4　撥音と接続していた母音の内訳

種類	句中	句末	合計
an	136	17	153
in	76	9	85
un	32	7	39
en	127	28	155
on	56	8	64

表5　連母音の種類別の個数（長音は　で塗りつぶし）

句中		句末		合計	
種類	個数	種類	個数	種類	個数
ou,oo	305	ai	57	ou,oo	360
ai	183	ou,oo	55	ai	240
ei,ee	134	io	29	ei,ee	150
uu	85	ao	23	uu	95
ii	62	ii	22	ii	84
oi	56	uo	22	io	69
aa	46	ei,ee	16	oi	69
io	40	oi	13	ao	61
ao	38	uu	10	aa	54
ia	35	aa	8	uo	46
ae	30	ae	6	ae	36
ui	30	ui	6	ia	36
uo	24	iu	6	ui	36
oa	20	eo	4	au	21
au	19	au	2	iu	21
ie	19	ia	1	eo	21
ea	18	ie	1	ie	20
eo	17	ea	1	oa	20
iu	15	oe	1	ea	19
oe	15	ue	1	oe	16
ue	8	oa	0	ue	9
ua	8	ua	0	ua	8
eu	1	eu	0	eu	1
計	1208	計	284	計	1492

３．４　考察

まず、定型の割合が半分を切っており、字余りが 47%だったことに着目する。万葉集では、4207 首(21208 句)中、字余りになっていた句が、1829 句というデータがある。(桑原修 2012,バーニジア大学の公開データを集計)複数の句が同時に字余りを起こしていた歌もあるため、字余りの歌の数は 1829 首よりも少なくなるだろう。割合に直すと、万葉集の字余りの歌は 43%以下であり、万葉の時代から現代にかけて字余りの歌は増加していると言える。

次に、字余り句(表１)に注目すると、初句＞四句＞二句＞結句＞三句の順で字余りが多い。初句・四句は、三句・結句の二倍以上の数があり、その差は顕著だ。上の句、下の句と分けた際、初句と四句はリズムの始まり、三句と結句はリズムの終わりと言える。リズムの始まりは字余りでも許容できるが、リズムの終わりは定型で整えたい、という意識があるとすると、リズムの中間である二句の字余り数が中間であることも説明が出来る。

また、字余りの形別の個数を昇順で並べる(表２)と、初句＞四句＞二句＞結句＞三句という、字余り句の多さに概ね従っているが、異なる傾向も見えため、以下の表に考察を示す。(表６)

表6　字余りの形上位 10 個

昇順	字余りの形	個数	考察
1	67577	128	初句＞四句＞二句＞結句＞三句の傾向に従っている。
2	57587	119	
3	58577	106	
4	77577	73	初句の二文字余りが、三句･結句の一文字余りよりも多い。つまり、初句字余りの許容度は最も高いと言える。
5	57677	46	結句＞三句の傾向と逆。結句の字余りは他の句の字余りと同時に起こりやすいのではないか。
6	57578	42	
7	58587	32	四句が 8 になる字余りの場合、初句＞二句の傾向と逆。8 と 8 に親和性があるのではないか。
8	67587	30	
9	57588	27	67578 の形よりも多く、初句＞四句の傾向と逆。8 と 8 に親和性があるのではないか。
10	77587	26	初句＞四句＞二句＞結句＞三句の傾向に従っている。

次に、字余り中の特殊な音に注目すると、句中と句末で傾向に変化が見られた。表３の数値を、句中：句末の比に直すと、撥音は約６：１、長音も約６：１、拗音は約１１：１、促音は９６：１となる。促音が極端に字余り句末になりにくいことが分かる。発音上、促音でリズムを切って一拍置く事が難しいからだと思われる。このことから、現代短歌は黙読での鑑賞が主流だが、音韻的・音声的な要素もリズムに関係していると考えられる。心の中で声に出して鑑賞しているような感覚だろう。

さらに表５では、[ai]が特殊な傾向を示している。全体的に長音が多いが、長音以外で比べると、[ai]は他の項目の３倍以上だ。そして、句中と句末で、[ai]と[ou,oo]の順位が逆転していることも特徴的だ。句中では、[ou,oo]は[ai]よりも約 100 個多くみられたが、句末ではほぼ同数となっている。このことから、句末の[ai]は二重母音として読まれ、二文字だが二音よりも短く読まれる傾向があると考えられる。

また、[io][ao][uo]が比較的多くみられるのは、「～を」の形で、[o]が頻繁に助詞として用いられていたからだと思われる。

最後に、研究結果を省略した助詞に関しては、特に傾向はみられなかった。短歌の批評会で、「ここは字余りになっても助詞を入れて、わかりやすくした方が良い」のように、意味をわかりやすくするために助詞を加えて字余りにするべきか、助詞を省略して定型に収めるべきか、議論されることがある。私見では、前者が推奨されることが多いように思われる。しかし、この議論は、助詞が一文字であることが念頭にあり、分類項目には適していなかったのだろう。実際は二文字や三文字の助詞もあり、助詞でなくとも一文字で意味を整えるような言葉はある。

４　アンケート調査による字余り分析の補完

４．１　アンケート調査の目的

前項の分類方法の弱点を補うことを目的とする。弱点とは、分類を手動で行う際、字余り句をどのように区切るか、主観的だった可能性があることだ。例えば、以下の歌の下の句の区切り方は、二つのパターンが考えられる。

「秋茄子を両手に乗せて光らせてどうして死ぬんだろう僕たちは　堂園昌彦」
・どうして死ぬんだ/ろう僕たちは
・どうして死ぬん/だろう僕たちは

ほとんどの字余り句は、作者もリズムに乗せる意識があるためか、迷うことなく読める。しかし、本研究で分類した短歌の中には、定型に挑戦するような散文的な歌や、意図的にリズムを崩していると思われる歌があった。このため、句の区切れ方が明確でない歌の、句中・句末という分類に誤差が生じている可能性がある。そこで、全国の歌人はどのような区切り方をしていて、筆者の区切り方と大きな差が無かったかを確かめる。

また、前項で行った統計的な分析結果が、全国の歌人の感覚と一致しているかどうかも、明らかにしたい。

４．２　方法

対象者：歌集を出版・短歌結社に所属している等の、歌人約 200 名に送付、79 名が回答。
調査期間：2021 年 7 月
手続き：アンケートを郵送にて送付し、同封した返信用封筒にて返送してもらった。
質問項目：以下に示す。

質問①以下の短歌の、初句・二句・三句・四句・結句の間を線で区切って下さい。※漢字で句またがり[4]をしている場合は、区切った線の上下に読み仮名を書いて下さい。
質問②リズムが崩れていると感じた歌は、リズムの崩れを感じた箇所に線を引いて下さい。特に崩れを感じない歌や、許容範囲と思う歌には、何も線を引かず、①の区切りのみを引いて下さい。

例）公園の/鳩爺逝けば/世話をした/無数の鳩に/天(そら)に運ばれ　笹公人
虹色の/鱗、真珠色(いろ)の鱗/飛び込めば河の/底は明るむ　齋藤芳生
ぼくらの川は/雨に濡れつつ/ゆくものだ/シェイクスピアの/墓に別れて　黒瀬珂瀾
かけがえのない/無実の罪で / 筋肉の / 光の充実 / ポップコーンといもうと　瀬戸夏子

質問③お名前と、年齢をお書きください。
質問④字余りに関して感じていることを、自由にお書き下さい。

質問①②の回答用の短歌は、上記の分析でも使用した『桜前線開架宣言 Born after 1970 現代短歌日本代表』より、３３首引用した。どこで区切るか迷った歌、字余りだがリズムが崩れていない歌、明らかにリズムが崩れている歌、などを選んだ。選ぶ際、何句目で字余りになっているか、統計的分析により重要と思われる撥音や二重母音が含まれているかなど、関連していると思われる要素をバランスよく含むようにした。

４．３　結果

区切り方の種類を色で分けながら集計した。(図２)情報量が多いため、本研究の論旨と強く関連している、全体の傾向と特徴的な歌の結果のみを紹介する。

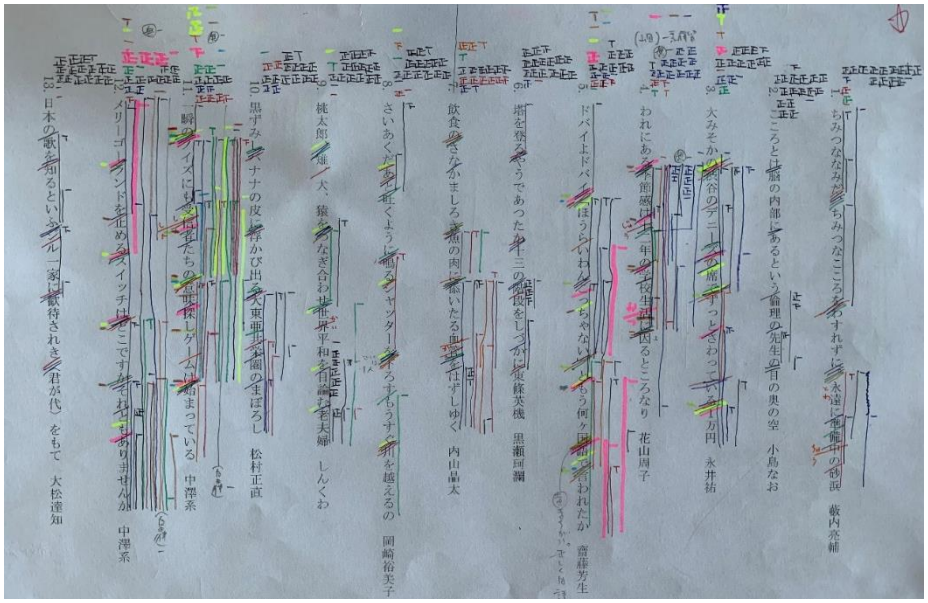

図２　アンケート集計紙の一部

[4] ５７５７７の句と句の間に、言葉がまたがっていること。例えば、岩波現代短歌辞典(1999)にある「ねこじやらしなど野の草は穂をたれてあらんあかるき秋津辺の道　上田三四二」の「ねこじやらしなど」は初句から二句にかけてまたがっている。

４．４　考察

以下の三つの傾向に分類することができる。

①最も多い区切り方の回答数が全体の８割を超えていて、感覚が共通している歌：１８首
②７種類以上の区切られ方の回答があり、様々な区切り方ができる歌：１０首
③最も多い区切り方の回答数と、２番目以降に多い区切り方の回答数の差が１１以下で、意見が割れている歌：４首

なお、②と③両方の傾向を示す歌が一首あったため、重複して数えている。以下、それぞれの傾向の短歌を、アンケート結果を示しながら考察する。

①感覚が共通している歌

「できない子はこれができない教科書をノートにそのまま写す〈写経〉が　大松達知」
・できない子は/これができない/教科書を/ノートにそのまま/写す〈写経〉が：73 名
・その他四種類の区切り方：6 名

「思ひのまましばし振る舞ひそののちに花盗人のごと許されたきを　横山未来子」
・思ひのまま/しばし振る舞ひ/そののちに/花盗人のごと/許されたきを：73 名
・思ひのまま/しばし振る舞ひ/そののちに/花盗人の/ごと許されたきを：6 名

このような字余り歌は、意味上の区切りと５・７・５・７・７のリズムが近いため、歌人の間で共通した感覚になっていると考えられる。意味上の区切りとは、助詞が句のはじめに来ておらず、単語の途中で句が分かれる、句またがりを起こしていないことを指す。また、字余り句が１か所のみであることも、区切り方を明快にしているであろう。

字余りの歌に統一的な区切り方があることがわかったため、本研究の分類方法も、この傾向を持つ歌に関しては、問題ないと言えるだろう。

②様々な区切り方ができる歌

「無化、し無化し　或るところに　悪じいさんと　汚ばあさんが酢　んでゐました幸せ　藪内亮輔」：18 種類
「見えますか食べものを出しっぱなしのテーブルあれが北海道です　雪船えま」15 種類
「こころに酔ってわすれないでふるさとの湿度を　あの風景の死を　井上法子」：14 種類

区切り方を複雑にしている原因は、以下のような特徴であると考えられる。
・句読点・空白等の表現の工夫が意味上の区切りと異なる箇所にあり、違和感をもたらす。
・意味で区切ると、句のはじめに撥音・促音がきて、音韻上発音に違和感をもたらす。
・意味で区切ると、字足らず句が発生し、リズムの乱れをもたらす。
・上記 3 つの理由によって他の区切り方を検討した場合、文節以外の場所で区切らざるを得ず、違和感のある句またがりとなる。

このような、意味で区切ると散文的になり、短歌のリズムとは異なる歌は多くない。字余りの範囲を超えていると判断した歌は、破調として分類していたため、本研究の分類方法に大きな影響はないと考える。

③意見が割れている歌
「秋茄子を両手に乗せて光らせてどうして死ぬんだろう僕たちは　堂園昌彦」
・どうして死ぬん/だろう僕たちは：36 名
・どうして死ぬんだ/ろう僕たちは：25 名
・どうして死ぬんだろう/僕たちは：18 名

「飲食のさなかましろき魚の肉に沿いたる血管をはずしゆく　内山晶太」
・沿いたる血/管をはずしゆく：12 名
・沿いたる血か/んをはずしゆく：29 名
・沿いたる血管/をはずしゆく：9 名
・沿いたる血管を/はずしゆく：29 名

意見が分かれている原因は、以下のような特徴であると考えられる。
・意味上で区切るとリズムが悪くなり、リズムで区切ると不自然な句またがりになる

上記の例では、「沿いたる血か/んをはずしゆく」だと、リズムは７・７の定型となるが、単語の途中で句またがりが起きてしまう。「沿いたる血管を/はずしゆく」だと、意味上の区切れは良いが、リズムは９・５と字余り、字足らずが起きてしまう。あっちを立てればこっちが立たず、区切り方を決める複数判断基準が相反した時に意見が割れている。
本研究の分類では、リズムを優先的な判断基準にして、句またがりを起こす区切り方を採用した。考察する際には、句またがりを許容した場合の統計データだということを留意しておく必要があるだろう。

５　結論

以下の事実が確認された。
・初句・四句は字余りになりやすく、三句・結句は字余りになりにくい。上の句と下の句における字余りの許容度は、「初句＝四句＞二句＞三句＝結句」であると考えられる。
・促音・撥音は句のはじめに来にくく、[ai]は句の終わりに来やすい等、音韻的な要素がリズムと関係している。

６　展望

６．１　定型とは何か

短歌の唯一の原則である「５・７・５・７・７」という定型のリズムは、１文字の長さが等しいという前提の下にある。別宮貞徳（2005）『日本語のリズム　四拍子文化論』でも、「日本語は、どの音（音節）もほぼ同じ長さ（時間）で発音されるのである。これを等時性という。」(p.56)「一音節のスフィンクス（sphinx）など、日本語では五音節、へたをすると六音節。」(p.62)として、外国語と比較しながらこの前提を確認している。しかし、現代短歌における日本語の等時性はより慎重に検討されるべきである。口語調や外来語の使用が増えていたり、句末の[ai]が二重母音として機能している可能性を本研究で指摘したりした。別宮貞徳（2005）からの引用部分にも「ほぼ」「へたをすると」という表現があるように、一音の等時性は絶対的ではなく、一音を等時で読む意識の上に成り立

っている。つまり、定型で読む意識が等時性の意識に勝る時、一音を短く読むことは可能だということだ。

すると、定型と字余りの境界線は曖昧になる。例えば、字余りの歌の文字数が「５・７・５・７・８」だったとしても、音の長さを数えると、「５・７・５・７・7,5」になっている可能性が考えられる。したがって、現代短歌のリズムをより正確に捉えるためには、文字数の定型と音数の定型を区別し、字余りと音余りを区別して考えるべきだ。ここで、音数の定型と音余りを定義するために、２つの方法を提案する。

１つ目は、１文字の音の長さを測定し音数の検討に用いることだ。短歌の朗読を計測する先行研究はある(桂広介,1968 など)が、複雑なリズムの短歌が増えた現状を分析するためには、改めて計測する必要がある。私見では、字余り句末の[ai]は短く読まれていると考えている。

２つ目は、「５・７・５・７・７」を音数の定型のプロトタイプとして捉えることだ。「５・７・５・７・７」は典型的なリズムの例であり、これに近似する音数の短歌も定型と見なす。例えば、結句の文字数を数えると８文字で字余りでも、８文字の音の長さを足すと 7.6 音になる場合、その句は音余りではない。どこまでを音数の定型と見なすか、境界線の引き方は難しいが、ここでも別宮貞徳（2005）で述べられていることが参考になる。短歌の朗読を計測した数理的な実験や、具体的な和歌俳句の検討を根拠に、「５・７・５・７・７」の間に適切な休符が入り、「８・８・８・８・８」の四拍子のリズムを作っていると結論付けている。したがって、音数の定型は「８・８・８・８・８」まで許容され、各句が８音を超えると音余りとする。

上記２つを音数の定型原則として、句ごとの字余りの許容度(初句＝四句＞二句＞三句＝結句)を組み合わせることで、現代短歌のリズムを正確に捉えられるのではないか。この仮説の検証には、短歌の朗読を計測して、各句の音の長さを確認する手法が有効だと思われる。この際、句ごとではなく１文字ごとの長さを精密に計測することで、句末の[ai]などのように特殊な働きをする音を、他にも見つけられる可能性がある。

６．２　日本語の二重母音について

研究結果から、句末の[ai]は二重母音として読まれ、二文字だが二音よりも短く読まれる傾向があると考えられる。このことから、日本語の二重母音を考察できるのではないか。

二重母音があるとされる英語だが、二重母音の定義は明確でない。これを指摘した、小野浩司(2011)では、「最後に二重母音のリストを挙げ本論のまとめとする。」(p.8)として、複数の音声学者の定義を表にしている。(表７)これらは異なる表現で二重母音と定義されたためゆれがあるが、結果として共通している音も多い。

表７　二重母音のリスト(小野, 2011, p. 8)

鳥居・兼子（1969）	ai, ou, ei, au, ɔi, eə(r), uə(r), iə(r), cə(r)
Kenyon（1951）	ai, au, iu, ɔi, ou, ei, ir, er, ar, ɔr, ur wi, we, wo, ji, je
枡矢（1976）	ei, ai, ɔi, au, ou, iə, εə, uə, ir, εr, ær, ar, ɔr, ur
竹林（1996）	ei, ai, ɔi, au, ou, ju:, iə, εə, uə, ir, εr, ar, ɔr, or, ur
Jones（1960）	ei, ou, ai, au, ɔi, iə, εə, ɔə, uə, ĭə, ŭə, ŭi, ŏi, ŏə, ĕə oi, eə, oə
Ladefoged（2006）	ai, aU, ei, oU, ju:, iə, εə, aə
Clark & Yallop（1995）	aU, ai, ei, oU, ɔi
Roca & Johnson（1999）	ei, ou, ai, au, ɔi, iə, uə, εə, ɔə
窪薗（2002）	ai, au, ae, ao, ei, eu, oi, ou

日本語に存在する母音に注目すると、[ei],[ou],[ai],[au]が全ての定義に共通している。このうち[ei]と[ou]は長音だ。表５を振り返ると、字余り句全体で、[ou]は最も多く、[ai][ei]がそれに続いて多い。一方[au]は[ei]の６分の１以下の個数で、特に傾向もみられない。このことから、英語で二重母音とされている[au]は、日本語で二重母音の働きをしていないことが推測できる。このように、現代短歌の字余りは、二重母音考察の新たな材料になるだろう。

６．３　他の日本語コーパスとの比較

本研究の分析結果は、日本語の均衡コーパスと比べることで新たな考察ができる可能性がある。例えば、字余り句中の長音：撥音は、約３：２だったが、日本語全体での比はどうなっているのだろうか。字余り句中の傾向と日本語均衡コーパスの傾向が異なっていた場合、それは字余り短歌特有の現象だと言える。ただし、話し言葉コーパスと書き言葉コーパスのどちらが比較対象として適切かは検討すべきだ。現代短歌は文語調のものも口語調のものもあり、本研究で音韻的要素も関連していると考察したからだ。

また、現代短歌コーパスを作成することにも、言語学的な意義があると考えられる。リズムを持った現代語の分析は、二重母音の定義などの、応用的な考察に利用できるからだ。課題としては、字余りの歌をコンピューターに区切らせる難しさと、大量の短歌データの調達方法が考えられる。前者はディープラーニングを使えば技術的には実現可能だろうが、そのためにも大量の教師データが必要になる。「うたよみん」「うたのわ」などの短歌共有サイトの協力が得られれば実現が見えてくるかもしれない。

７　謝辞

本論文を作成するにあたり、アンケートにご協力いただいた歌人の方々には大変お世話になった。自由記述欄への回答率は 100%で、非常に有益なコメントを賜った。皆様にこの場を借りて感謝申し上げる。

８　参考文献

山口佳紀（2008）『万葉集字余りの研究』壇書房
岡井隆（1999）『岩波現代短歌辞典』岩波書店

パネリスト・山口佳紀、毛利正守、高山倫明　司会・湯沢質幸（2005）『字余り研究の射程』「日本語学会 2005 年度春季大会シンポジウム報告」
高山倫明（2006）『音節構造と字余り論』九州大学国語国文学会
桐越舞（2011）『韻文の言語リズムにみられる韻律フレーム型』北海道言語研究会
桐越舞（2012）『ポーズを指標とした俳句形式の韻律フレームに関する実験音声学的研究』実験音声学・言語学研究
桐越舞（2015）『韻文の言語リズムに関する実験音声学的研究』筑波大学博士(言語学)請求論文
窪薗晴夫（1998）『モーラと音節の普遍性』「音声研究」第二巻第一号
毛利正守（2009）『[書評]万葉集字余りの研究』「日本語の研究」第５巻３号
川原繁人（2015）『音とことばのふしぎな世界』岩波書店
川原繁人（2018）『ビジュアル音声学』三省堂
別宮貞徳（2005）『日本語のリズム　四拍子文化論』筑摩書房
坂野信彦（1996）『七五調の謎をとく　日本語リズム原論』大修館書店
橋本陽介（2016）『日本語の謎を解く　最新言語学 Q&A』新潮社
広瀬友紀（2017）『ちいさい言語学者の冒険　子どもに学ぶことばの秘密』岩波書店
金田一春彦（1988）『日本語　新版(上)』『日本語　新版(下)』岩波書店
佐佐木幸綱・谷岡亜紀（1989）『短歌をつくろう』さ・え・ら書房
栗木京子（2010）『短歌をつくろう』岩波書店
佐佐木幸綱（2020）『知識ゼロからの短歌入門』幻冬舎
俵万智（2004）『考える短歌』新潮社
有吉保（1982）『和歌文学辞典』桜楓社